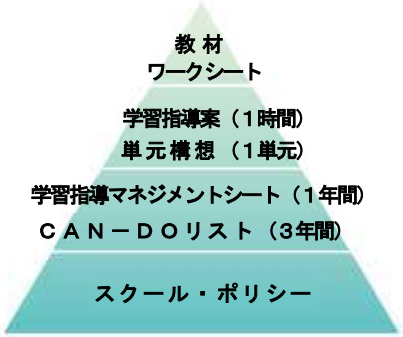
❷　いま英語教育に求められるもの

グローバル化や情報化が進展する社会において，子どもたちは予測できない未来に対応し，よりよい人生を自ら創り出していかなくてはなりません。そのために，学校教育には，自ら問いを立て解決を目指す力，他者と協働しながら新たな価値を生み出していく力，膨大な情報から何が重要かを主体的に判断する力などの育成が求められます。このような状況の中で英語教育が果たす役割として，外国語の背景にある文化に対する理解を深め，英語で主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度や，実際のコミュニケーションの中で知識を適切に活用する技能の育成などが挙げられます。ここでは，生徒の将来を見通した上で，高等学校における英語教育が効果的なものとなるための指針を示します。

１　ＣＡＮ－ＤＯリストの活用

生徒がどのような英語力を身に付けることができるのか，高校卒業時及び学年ごとの「学習到達目標」として示した各学校のＣＡＮ－ＤＯリストを活用しましょう。教師にとって，生徒の学びをサポートするための共通の指針となるだけでなく，生徒にとっても，学習到達目標を基に見通しを立てて学習に取り組む手助けとなります。また，他教科や同学年のスタッフ，保護者にもＣＡＮ－ＤＯリストを示し，学習到達目標を共有しましょう。このＣＡＮ－ＤＯリストを基に，学習指導マネジメントシートを作成します。その指導計画を基に単元構想を練り，各単元の目標を達成するための言語活動や，単元の評価規準と評価方法を，評価の観点や４技能５領域のバランスを考慮しながら定めます。



日々の授業が，右上の図のように，スクール・ポリシー，ＣＡＮ－ＤＯリスト，学習指導マネジメントシート，単元構想などそれぞれに基づいたものであることを常に意識し，つながりのある一貫した指導を心がけましょう。また，ＰＤＣＡサイクルを意識し，各学期末や学年末に生徒の学習到達目標を確認するとともにＣＡＮ－ＤＯリストの見直しを図り，授業改善につなげていくことが必要です。

２　新しい時代に求められる資質・能力の育成

学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

「学びに向かう力・人間性」を養うためには，「主体的・対話的で深い学び」を実現させることが必要です。そのためには，自ら課題を発見し，その解決に向けてペアやグループで取り組み，理解を深めるような学びを多く取り入れましょう。例えば，教科書の題材に応じて，環境問題の解決や宇宙開発の在り方など，答えが一つに限定されない課題について，ディスカッションやディベートの形で取り組む活動があります。学び合いや考えを伝え合う活動を通して必要な知識やさまざまな情報が結び付き，内容理解が深まることで，学習への動機付けや興味･関心がさらに高まることが期待できます。学習の過程で生徒の思考が活性化され，より広い視野から問題を捉え，課題を解決する力を養うことを目指しましょう。

未知の状況にも対応できる「思考力，判断力，表現力等」の育成

授業を実際のコミュニケーションの場面とするために，生徒同士が自分の意見や考えを英語で伝え合う機会を授業の中で設定することが必要です。言語活動を行う上で，「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」「読むこと」「書くこと」を効果的に結び付ける工夫をしましょう。例えば，「読むこと」や「聞くこと」によって概要や要点を捉えさせ，それについて英語で話し合わせたり，話し合った内容の要約文を書かせたりすることで「話すこと」や「書くこと」につなげることができます。さらに，題材の内容に関して，自分の意見や考えを発表したり討論したりする活動に発展させることもできます。各技能を個別に扱うのではなく，複数の技能を互いに関連付けながら，４技能５領域を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することが必要です。

特に，多様な考え方が可能な話題について意見を伝え合う活動を設定し，即興で話したり論理的に表現したりする力を養いましょう。例えば，授業にスピーチやプレゼンテーション，ディスカッションやディベートなどの言語活動を取り入れることにより，自分の意見の論点や根拠を明らかにして相手に分かりやすく伝え，相手の質問や反論に即興で対応する力を育成できると考えられます。その際，論理の展開や表現の方法を工夫させることや，ＩＣＴ機器を用いて意見の裏付けとなる情報や資料を生徒が自主的に探し活用できるよう指導することも大切です。また，聞き手は話し手に質問や感想を返すなど，即興的かつ双方向的な活動を目指しましょう。

生きて働く「知識・技能」の習得

「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためには，豊かな知識と技能が必要です。伝え合う活動などを通して知識・技能の必要性を生徒自らが感じ取り，「もっと語彙や表現を知りたい」と意欲的にインプットに取り組むことができるとよいでしょう。そのためには，例えば「電話の応答」「日本文化の紹介」のような具体的な言語の使用場面や状況を設定することが有効です。常にアウトプットを意識させながら，ペアやグループによる言語活動に取り組ませましょう。新しい知識を理解してから使わせるのではなく，生徒に使わせながら気付きや理解を促すよう指導するとより効果的です。文法や語彙などの知識を“コミュニケーションの支柱”として捉え，活用できる知識・技能の定着を図りましょう。

3　学習評価の工夫

「指導と評価の充実に向けて　～学習評価の工夫改善を意識した学習指導のポイント～」（愛知県総合教育センター）にも，詳しく解説されています。

(1) 観点別評価

学習到達目標に照らして，生徒の学習状況を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点から評価します。それぞれの観点について，学習指導マネジメントシートや単元構想の中で単元の評価規準を設定し，評価方法を明確にします。方法の一つとして，定期考査の設問ごとに評価の観点を明示し，答案返却後，生徒に観点別の学習到達度を把握させるなどの工夫も効果的でしょう。さらに，定期考査だけでは測ることのできない力を評価し，生徒の学びを見取るために，パフォーマンステストを実施したり，授業中の活動を継続的に観察したりすることが求められます。

(2) パフォーマンス評価

年間を通して４技能５領域を総合的に評価するために，パフォーマンステストを実施することが必要です。スピーチ，プレゼンテーション，エッセー・ライティング等に取り組ませることで，身に付いた力を評価します。パフォーマンス評価を行う際には，測りたい能力（評価項目）を明確にした上で，ルーブリック（評価基準表）を作成しましょう。教師間で「何をどのように評価するのか」という基準を共有することにより，評価に差が出にくくなり，評価の信頼性が高まります。また，生徒にルーブリックを事前に示すことで，生徒は何を学ぶべきかが分かり，学習に取り組みやすくなります。タブレット端末などを活用し，パフォーマンスの様子を記録することも可能です。生徒の学習成果や課題を的確に把握し，それらを生徒に還元することで，学習の改善につなげることができます。また，評価を教師の振り返りや授業改善にも生かし，指導と評価の一体化を図りましょう。

【関連資料】パフォーマンステストのルーブリック（例）プレゼンテーション　領域：「話すこと（発表）」

≪内容≫「多文化共生に向けて自分たちにできること」：アイディア・企画を具体的かつ論理的に口頭で伝える。

≪採点の基準≫

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に楽手に取り組む態度
a	[知識]語彙や表現が適切に使用されている。 [技能]聞き手に分かりやすい音声等で話して伝えている。	詳細な具体例とともに論理的に発表しており，聞き手に訴えかけるプレゼンになっている。	原稿から目を上げアイコンタクトをとり，堂々とした態度で語るなど，プレゼンをよりよいものにしようとしている。
b	[知識]多少の誤りはあるが，理解に支障のない程度の語彙や表現を使って明瞭に話して伝えている。 [技能]声の大きさ，発音，明瞭さは平均的である。	論理性や具体性にやや欠ける部分もあるが，プレゼン内容としては理解に支障がない。	原稿に視線を落とすことが度々あるものの，アイコンタクトや堂々とした態度に留意して発表しようとしている。
c	bを満たしていない。	bを満たしていない。	bを満たしていない。